

Web-Based Training Course の導入と利用

—TOEIC 試験との関係, 長野高専での英語指導の中の位置づけ—

小澤志朗* 中村護光* 吉野康子** 富永和元**

Introduction of a Web-Based Training Course to Nagano Kosen and Its Current Usage
— In Relation to TOEIC and English Teaching at Nagano Kosen

OZAWA Shiro, NAKAMURA Morimitsu, YOSHINO Yasuko and TOMINAGA Wagen

A web-based training course, 'NetAcademy' by ALC, was introduced to Nagano Kosen in 2002. It has been used by students of the third-year and above, as well as teachers. This course is aimed at not only improving learners' general comprehension in English, but also training them for higher scores in the TOEIC test. This paper describes how the system has been used, and studies how we should make the better use of it for teaching English at Nagano Kosen.

キーワード: NetAcademy, TOEIC, 外部検定試験

1. はじめに

長野高専ではイントラネット環境を利用した学習システムの一つであるアルク教育社の NetAcademy を平成 13 年度末に導入した。同時に TOEIC 受験準備のソフトウェアである「初・中級学習者のためのコース」を導入した。これは WBT (Web-Based Training) と呼ばれる Web ページへの応答を中心としたコンピュータの能力を本格的に活用し、一人一人の進度に合った学習を可能にする比較的新しい教育方法である。

しかし、平成 14 年度には、英語の授業で主として利用している AVC 室のパソコンの処理能力が低く、上記システムの本格的活用は難しかった。その後平成 14 年度末にパソコンのリプレースが完了し、ハードウェア、ソフトウェア共に満足のできる環境が整った。

* 一般科教授

** 一般科助教授

原稿受付 2004 年 5 月 20 日

平成 15 年度には「スタンダードコース」を導入し、さらに本格的な利用に備えた。

本報告では、現在までの利用状況、TOEIC 試験との関係、長野高専での英語指導の中での位置づけを中心に報告したい。

2. NetAcademy コースについて

NetAcademy についての詳細はアルク教育社発行のそれぞれの資料に譲り、ここでは要点のみを簡条書きで記し、全体像を把握できるようにしてみたい。¹⁾

2-1 特徴

- 本校の NetAcademy は、現在専攻科生を含む 3 年生以上の学生と教職員の利用が可能である。
- イントラネットであるので、校内のコンピュータ端末からならいつでもどこでも利用可能である。寮での利用も含まれる。
- 利用登録に関しては 1 年毎としている。これは、利用可能なコンテンツが豊富で、何回か繰り返して使うことにも耐えられると判断しているから

である。年毎の学習記録が手元に欲しい場合にはファイルの形で個人的にFDなどに保存できる。

○ソフトウェア、ハードウェアの管理は、サーバーの置いてある情報教育センター管理室に全面的にバックアップを受けている。学習状況の管理は英語科でも可能であり、実際に行っている。

現在利用可能なソフトウェアは下表1のとおり。

表1 長野高専導入済 MetAcademy コース内訳

学習メニュー (コース名)	初・中級者のためのスコアアップコース	スタンダードコース
		レベル診断テスト
	リスニング力強化コース	リスニング力強化コース
	リーディング力強化コース	リーディング力強化コース
	TOEICテスト演習コース	TOEICテスト演習コース
	中間テスト・修了テスト	
	TOEICテストパート演習コース	
対象レベル	470~550 突破を目標	取得スコア 300~800

2-2 利用方法

○利用の手続きは、登録のみである。詳細な使用方法のオリエンテーションは特に必要ない。画面の指示にしたがって学習を進めれば良い。特にインターネットやパソコンの操作に慣れた学生には機器の操作の説明はほとんど不要である。

○4, 5年生および専攻科生には授業中に使用法を指導し、さらに授業中に利用の時間を取っている。

○希望者が随時利用するというライブラリー方式も可能である。

2-3 利用状況

○導入された平成14年度には前述した理由でほとんど利用できなかった。表2は平成15年度のものである。(資料は管理者として入手したものである)

表2 登録者数および使用率 平成15年度

	ユニット(コース)別	登録数	使用者数	使用率
初 中 級	リスニングコース	662	209	31.6
	リーディングコース	662	196	29.6
	TOEIC演習コース	662	148	22.4
	TOEICパート演習	662	76	11.5
	中間試験・修了試験	51	44	86.3
ス タ ン ダ ー ド	レベル診断 語彙	662	122	18.4
	レベル診断リスニング	662	122	18.4
	リスニングコース	84	22	26.2
	リーディングコース	84	28	33.3
	TOEIC演習コース	84	12	14.3

これを見ると、初・中級コースでは、使用率はリスニング、リーディングとも30%程度である。TOEIC演習とTOEICパート演習は使用率が下がっている。

中間試験と修了試験の使用(実施)率は高いが、これはこの試験の結果が正規の授業の評価の中に加えられたからである。中間試験受講はリスニング、リーディングコースの各10ユニットおよびTOEICテスト演習5ユニットを終えることが条件である。中間試験後、残りの25ユニットが学習可能になり最後に修了試験が可能になる。

NetAcademyは、各自が好きな時に好きな場所で学習するという、いわゆるライブラリーユースも可能であるが、初・中級コースでの一応の最終段階である終了試験まで行う学習者は少ない。授業内で、例えば成績に加味するなどの奨励(強制?)策を取らない限りはなかなか自発的に利用するという姿勢は見えない。

中間・修了試験を終えた学生44名の内42名は授業中の指導の一環として半強制的に学習をしたグループである。

スタンダードコースについては、使用率はおおむね低い。その中でもリスニングコース、リーディングコースは、登録者数が少ないので高い使用率は見かけ上のものである。

以上のことから、①全体的な使用率を上げる必要があること、②ネットアカデミーの内容が学生に良く知られていない現状では、高学年の英語の授業を積極的に利用し、実際に何回も使わせること、③そして、時に応じて TOEIC の試験に挑戦するなどして自分の英語力の確認をさせること、が必要と考える。

下の表 3 のより詳しい使用状況を見ると、それぞれのコースの受講者の受講回数、あるいは教材数がわかる。ここでは全体として受講者数が多い初・中級コースの受講状況について考察する。

初・中級コースのリスニング、リーディングコースには、ユニットが全部で 20 ある。平均受講回数を見ると 20 に近いのに、受講教材数は約半分であり、進捗率 (%) の平均を見ても 50% 程度しかすすんでいないことがわかる。単純に考えて 2 回のアクセスで 1 ユニットの学習をしていることになる。また、リスニングコースに比べてリーディングコースの受講回数、教材数、進捗率がやや高いのは、恐らくリスニングの問題は 1 度聞いて自分なりの解答を出し、答の確認の作業が済めば 2 度目はそれをある程度記憶してしま

うので新鮮さが薄れるためであろう。それに対し、リーディング問題は問題文を何回も読んだりする作業を経て解答をしているものと想像される。つまり、リーディングの方が時間がかかる (不得意な) わけである。実際の長野高専生の TOEIC の得点を見てもリスニングの方がリーディングより高く、各部門 445 点満点、合計 990 点満点の試験結果で平均合計点 349 のところ、リスニングの得点の方が常に 50~80 点良い。これは日本人受験者の一般的な傾向でもある。

100%受講者数とその使用者数に対する割合を見ると、TOEIC 演習と TOEIC パート演習の方が、リスニング、リーディングコースよりも高い。特に TOEIC パート演習は実際の TOEIC 試験問題の出題形式と同じで Part I から VII まであり、TOEIC 試験の内容を知るには好都合であるので、そこをとりあえず 100% 済ませたのではないかと思われる。

中間試験・期末試験と、スタンダードコースのレベル診断テストは、何回も受講することができず、できるだけ 1 回で修了することが求められているためか、平均受講教材数は低い。

表 3 使用者の受講回数、受講教材数、進捗状況 (平均の数値は使用者数に対するもの)

コース別	受講回数	平均受講回数	受講教材数	平均受講教材数	進捗%合計	平均進捗%	100%受講者数	対使用者割合	
初 中 級	リスニングコース	3631	17.4	2022	9.7	9785	46.8	40	19.1
	リーディングコース	3824	19.5	2037	10.4	9845	50.2	39	19.9
	TOEIC 演習コース	1504	10.2	594	4	5060	34.2	36	24.3
	TOEIC パート演習	688	9.1	296	3.9	3889	51.2	29	38.2
	中間試験・修了試験	200	4.5	77	1.8	3750	85.2	33	75
ス タ ン ダ ー ド	レベル診断 語彙	216	1.8	216	1.8	10300	84.4	84	68.9
	レベル診断リスニング	216	1.8	244	2				
	リスニングコース	111	5	75	3.4	126	5.7	0	0
	リーディングコース	217	7.8	184	6.6	342	12.2	0	0
	TOEIC 演習コース	40	3.3	21	1.8	130	10.8	0	0

3. 全国高専、大学の導入状況

最新の統計資料はないが、ALC 教育社の導入事例資料によると全国のかなりの国公私立大学、高等専門学校で導入、利用されている。2003年9月時点では全国高等専門学校62校のうち20校が導入しており、現在はさらに増えていることが想像される。利用対象者として全学生を設定している学校も4校あるが、3年生以上で専攻科の学生も含むところが多い。利用形態としては授業中での活用+自己学習(ライブラリーユース)用が長野高専を含めて14校であり、主流と見てよい。

4. 長野高専の TOEIC 受験状況 (JABEE との関係)

そもそも NetAcademy は TOEIC テストのスコアアップ用である。そこで現在までの受験状況をここで概括しておく。ただ、我々が一番知りたいと思う NetAcademy の受講と TOEIC テストのスコアの関係は、今のところはっきりとしたことは言えない。

表 4 TOEIC 受験の記録 平成 13~平成 15 年度

試験日	受験者数 (年度計)	総合計点		
		平均	最高	最低
2001.1.31	36 (36)	331.3	540	210
2001.5.30	83	341.0	940	160
2001.12.12	73 (156)	324.9	685	165
2002.5.29	56	358.0	625	235
2002.9.27	54	309.0	585	130
2002.12.27	36 (146)	336.0	590	175
2003.5.28	45	381.8	960	120
2003.12.27	26 (71)	410.2	920	275
平均点		349.0	730.6	183.8

NetAcademy を本格的に実施し(授業に取り入れ)たのが平成 15 年度の 3 学年の学生であったため、主として 4・5 年生が受験している TOEIC テストを受験している学生がまだ少ないためである。

受験者数は平成 13 年度と平成 14 年度に多かったが、平成 15 年度にはやや落ち込んだ。平成 16 年度以降は JABEE の審査を控え、増加するものと思われる。総合点は、リスニングとリーディングの両部門の合計である。ただしこれは高得点を収めた留学生の点数を含んでいる。次表は日本人学生のみのものである。

表 5 長野高専の日本人学生のみ得点

	合計	聴解	読解
平均	335.6	202.8	132.8
最高	750	450	380
最低	120	75	25

表 6 TOEIC 運営委員会『TOEIC テスト 2002 DATA & ANALYSIS』からの高専生の全国平均の数値²⁾

	合計	聴解	読解
平均	337	200	137

両者はほぼ同じ数値であるが、大学生に比べると低いことには変わりがない。現在までの留学生も含めた受験生の得点幅の度数分布を次に示す。

表 7 長野高専全受験者の得点別度数分布

得点範囲	人数	%
700~795	7	1.7
600~695	7	1.7
500~595	15	3.7
400~495	58	14.2
300~395	157	38.4
200~295	151	36.9
~200	14	3.4
合計	409	

表 7 の 700 点以上というのは 2 人を除いて留学生である。留学生は 600 点台にも 2 人いる。全受験者のほぼ 75% (3/4) を占める学生が 200~395 点の幅に在る。問題なのは 295 点以下の約 40% である。この中には本人の強い意志で受験をしているわけではな

く、低い得点にとどまっている可能性のある学生も含まれている。いずれにしても中学3年間に加えて3あるいは4年間の学習の結果としては問題である。

5. 進級・卒業に関する内規の中の技能審査による単位認定について

平成16年度から技能審査による単位認定の中にTOEIC得点が加わった。これを機にTOEICに積極的に挑戦し、自分の学力を確認しながら学習を進めて欲しいと考えている。

TOEIC試験の結果は、5点刻みで示されるので、例えば実用英検などよりも、ある一定期間の学力の伸びを測りやすい。TOEICの得点を単位認定している高専は現在は本校を含めて20校程度であるが、実用英検、工業英検の単位認定の時のように今後認定する学校が確実に増えるものと思われる。³⁾

6. 英語教育課程の中の検定試験の位置づけ

NetAcademyと、TOEICのことを中心に述べてきたが、「初めに外部検定試験ありき」ではないことは言うまでもない。まずは授業やあらゆる機会を捉えて英語の学力を高めることが重要であり、そのための手段として外部試験を利用しているわけである。英語という教科の特性を述べることでその理由を説明したい。

英語を学び始めて入門期を過ぎると、自分の学力の伸びがあるのか、あるとしたらその時点でどの程度のことか理解でき、何ができるのか、ということが良くわからなくなるのが一般的であろう。これは、日本語(国語)の学習過程を思い出してもうなずけるのではないだろうか。つまり言葉(単語)一つを覚え、それが周囲の人を動かし、あるいは自分でも他人の言っていることがそれだけわかるというのが入門期である。ゼロと1の違いは大きなもので、喜びを感じる場面でもある。だんだん複雑なことを覚え、知識もたまってくると、そこに1つの新知識が加わっても大きな差は感じられないのである。そのうちに常に自分を上級者と比べたり、覚えることの膨大さを感じた末、努力を

徒労に感じるようになり、学習への嫌悪感が先立ち、教科そのものも嫌いになっていく学習者も少なくない。

このような学習者を説得するには、学年毎、学期毎に行っている定期試験だけでは不十分である。なぜなら定期試験には(比較的少ない)試験問題作成範囲があり、広い意味での実力を測っているとは言い難いからである。

以下に示すのは、現在英語科で共通認識を持っている各学年における段階的到達目標である。

表8 外部試験を用いた到達目標

学年	外部検定等				備考
	実用英検	工業英検	TOEIC	統一試験 ACE	
1	3級			430～ 460	
2	3級, 準2級	4級		430～ 460	
3	準2級, 2級	3級	300	500～ 540	関門
4	準2級, 2級	3級	320	500～ 540	
5	2級	3級	350	660	関門
専1	2級	3級	375	—	
専2	2級, 準1級	3級	400	—	卒業要件

ここで、統一試験 ACE というのは、TOEIC に似た外部の実力試験であり、本校では5年生まで共通して実施しているものである。また、右端の備考欄の「関門」というのは、それぞれのところで、次学年に進む目安としての関門を設けたらどうかという検討を英語科で行っているところである。

7. おわりに：今後の方向付けについて

真の英語力は、しばしば「使える英語」と呼ばれるように、知識を獲得するだけでは充分ではない。その知識を様々な場面で使いこなせる技能を身に付けることが必要となる。このためには訓練が必要であり、教授者と学習者の両者の努力が必要となるのは当然であるが、ある一定以上の力をつけようとするなら個々の学習者の一層の努力が成功へのカギとなる。

このための学習環境は、最近では特にインターネットの発展、英語学習に対する社会的な関心の高まりもあってかなり充実した教材も社会に溢れている。ところが、社会に溢れているのは大学入試のための難しそうに見える教材群と、ひとつおりの英語学習を終えた社会人向けの教材群である。高専生は、まず自分のレベルに合った教材を探すことから始めざるを得ないのだが、それほど簡単ではない。この点で、高専在学中に段階的な道筋をつけやすいスケールとしてTOEICを利用し、着実に学力をつけることは1つの有効な手段である。

以上のことから、長野高専の英語科では今後もTOEICの受験を奨励していくつもりである。ひいてはそれが個々の学生の英語力向上を通しての社会での活躍につながって欲しいものである。

最後に、NetAcademyの導入に関して学校当局の積極的なバックアップがあったこと、また管理運営に関しても技術室から全面的な協力を受けていることを記しておきたい。そして、TOEIC受験に関しても学校全体として団体賛助会員となったことは、外部試験を利用した英語指導の推進に大きな力になっている。

参考文献

- 1) ALC教育社：ALCNetAcademy（パンフレット）
- 2) 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
TOEIC運営委員会：2002年度学校IPテストデータ
- 3) 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
TOEIC運営委員会：TOEICテスト 入学試験・単位認定における活用状況—大学院・大学・短期大学・高等専門学校—(2003.12).